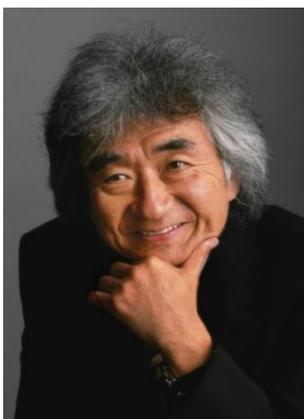


2024年6月23日

## 1962年は前衛の年

田邊克彦



小澤征爾が亡くなった（2月6日）。私が初めて彼の指揮を見たのは1962年7月、出来たばかりの上野の東京文化会館だった。

メシアンの大傑作「トゥランガリラ」の日本初演の時だ。劇場は日本中の前衛（アバンギャルド）たちで満席だった。必ずしもその人自身が前衛でなくとも、前衛音楽を好む人達が沢山いたのだ。

60年代は欧州中心に前衛音楽が花開き、咲き誇っていた。12音音楽、電子音楽、ミュージック・ユングレート etc. いずれもスタートしたのは50年代だったが、人に聴かせるまでに成長したのは60年代になってからだ。シュトックハウゼン、ルイジ・ノーノ、ドイツにはポッパルトという都市があつて積極的に新しい音楽、新しい楽器などを開拓していた。いつまでも3大B（バッハ、ベートーヴェン、ブラームス）をやっていたらいいという訳ではない。“自分たちの音楽を創ろう”というのが合言葉だった。

それに日本の音楽家も呼応した。黛敏郎は「三人の会」（芥川也寸志、團伊玖磨）を組織し、早くも「涅槃」（50年代）を発表していたし、武満徹も作曲に励んでいた。日本中の音楽好きが、新しい音楽を求めていたのだ。

舞台にはメシアンのほかにイヴォンヌ・ロリオも（オンド・アルト、奏者は本荘 玲子）挨拶に出てきて、会場は大いに盛り上がった。私もその中にいたのだ。という訳で、本日は小澤の演奏を取り上げた。

曲は武満徹の

・「ノーベンバー・ステップス」(20:24)

・「地平線のドーリア」(9:05)

小澤征爾指揮トロント交響楽団 1994年録音 (RCA, BVCE-9383)

小澤については日本人で世界に通用した最初の指揮者などと讃える声が多いが、実際は色々と問題を起こす“問題児”でもあった。

